

愛に守られて

日本キリスト教団伏見教会牧師
宮川 経範

神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。わたしたちは決して恐れない／地が姿を変え／山々が揺らいで海の中に移るとも海の水が騒ぎ、沸き返り／その高ぶるさまに山々が震えとも。大河とその流れは、神の都に喜びを与える／いと高き神のいます聖所に。神はその中にいまし、都は揺らぐことがない。夜明けとともに、神は助けをお与えになる。すべての民は騒ぎ、国々は揺らぐ。神が御声を出されると、地は溶け去る。万軍の主はわたしたちと共にいます。ヤコブの神はわたしたちの砦の塔。主の成し遂げられることを仰ぎ見よう。主はこの地を圧倒される。地の果てまで、戦いを断ち／弓を砕き槍を折り、盾を焼き払われる。「力を捨てよ、知れ／わたしは神。国々にあがめられ、この地であがめられる。」万軍の主はわたしたちと共にいます。ヤコブの神はわたしたちの砦の塔。

(詩編 46 編 2-12 節)

こんにちは。私は京都市伏見区の大手筋商店街近くの伏見教会で牧師をしています。伏見教会に赴任して 13 年が経ちました。赴任当初、「街の中の緑」「教会のシンボル」「人々の幸せ」など色々と思いめぐらせ、「庭いっぱいバラの花を咲かせよう」と思い立って教会の庭をバラ園にしています。つるバラを中心に約 40～50 の株を育てています。今まさにバラの季節真っ盛りで皆さまに喜ばれています。

主イエスが「空の鳥を見よ、野の花を見よ」と言われたとおり自然の生き物と接していますと教えられることが多々あります。ときには目の覚めるような、神さまの聖心を聞くような体験をします。3 月にこんな出来事がありました。

門の横のポールに絡ませ、高さ 4m ほどに生い茂るつるバラがあります。薄いピンク色の小さな花を一面に咲かせるバラで細い枝をととてもたくさん伸ばして茂るので、無駄な枝を切り取る剪定という作業をしっかりとやらねばなりません。ところが、たくさんの雀たちがチュンチュンと楽しそうにお宿にしている...困りました。かわいそう...、どうしよう...、私は三週間ほど思いあぐんだ末、剪定を決行しました。

ようやく剪定をやり遂げ、片付けをしていた時の出来事です。頭上でバサッと大きな音が

したので見上げると、なんと小型猛禽類ツミ(雀鷹:鳩くらいの大きさ、小鳥を捕食する日本最小のタカ)が、トゲトゲの枝だけになったバラの茂みに突っ込み、引っかかってぶら下がったのです。

引っかかったツミのわずか 30 cm前には小さな雀が三羽ほど茂みの中で肩を寄せ合ってじっと止まっていました。しばらくして格好悪く引っかかっていたツミは、ヨレヨレしながら飛び去りました。すると、つるバラの枝の籠に守られた雀たちは、何事もなかったかのように動き始めたのでした。

街中、目の前で鷹の狩りを目撃して驚きました。が、それ以上に私は、小さな雀たちの落ち着いた姿、その度胸に心打たれました。彼らはバラの茂みの中にいれば安心安全であることを知っていたのです。つるバラの枝の籠が必ず守ってくれると信じて、慌てることがなかったのです。剪定作業中でも私の傍近くに止まりに来ていた理由に合点しました。

私はハッとしました。雀の本能であったとしても、その知恵と仕組みが確かに用意され、小さな雀たちはそれをしっかりと受け止めて平安を得ている。ならば人間の私たちは...つるバラの中の雀たちが、ふと私たちの姿に見えてきました。人間社会に生きる私たちはその雀たちのように確たる知恵に生き、信頼をもって、平安を得て生きているのでしょうか？

詩編 46 編はその知恵への信頼、信仰を謳い、人間社会の在り方を示していると思います。神の民と呼ばれた人々は、ヒゼキヤ王時代、敵国アッシリア軍によって都エルサレムを包囲され国家的危機に陥ったが、都は奇跡的に守られたと記録されています。

2 節の「**神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。**」は、外的な状況がどれほど揺らいでも、神のご臨在は揺るがないと信仰告白し、確たる知恵に信頼を置いています。実際の川がないエルサレムですから、5 節の「**大河とその流れは、神の都に喜びを与える**」は、神の祝福を表しています。9,10 節「**主の成し遂げられることを仰ぎ見よう。」「主はこの地を圧倒される。」「地の果てまで、戦いを断ち弓を砕き槍を折り、盾を焼き払われる。**」だからこそ、神の前で、すなわち偉大な知恵の前で人は 11 節「**力を捨てよ**」と命じられているのです。

主権者は神であり、人はその「**主の成し遂げられることを仰ぎ見る**」存在なのです。人が己の力で何かむなしいことを企むのではなく、主権者の神がなされ、人は神を仰ぎ見る、す

なわち人は偉大な知恵と摂理(仕組み)の中に身を置きなさい、と詩編は謳うのです。

宗教改革者ルターは「讃美歌21」377 番で「神はわが砦、わが強き盾」とその信仰を歌います。この信仰、この姿勢には、暴力や戦争を正当化する余地は全くありません。

新聞で読んだのですが、ユダヤ人の立場から今のイスラエル国家を批判的に考察する歴史家がいます。モントリオール大学名誉教授のヤコブ・ラブキンさんです。彼は伝統的なユダヤ教の理解では、ユダヤ人は救世主の出現によって聖地に「戻される」のであって、人間の意思で能動的に「戻る」ことは神の主権に反するという考えがあるといいます。ラブキンさんは、シオニズムの起源を歴史的にたどり、17 世紀のプロテスタント神学の影響や、19 世紀後半のナショナリズムの高まりの中で形成された政治運動として位置づけ、宗教的信仰というより、民族的アイデンティティを求める動きとして理解すべきだと指摘しています。そこで、植民地入植というものは、追い出した側は報復を受ける恐怖心から、さらに入植地を拡大し続け、不安と暴力が連鎖する構図をはらむと批判しています。(2026 年 1 月 26 日付朝日新聞デジタル掲載、インタビュー記事から)

その通りだと思います。神の真理、知恵と摂理に基づかない信仰には平安は伴わず、怖れと争いの渦に飲み込まれて行くだけでしょ。人が驕り高ぶってはならない、主権者は神であって、人は神の業を仰ぎ見る立場であることを改めて認識させられました。

3 月 5 日、ホワイトハウス執務室で福音派牧師たちが、米大統領を取り囲み、牧師職を承認する^{あんしゅれい}按手礼の形で祈りを捧げた(3 月 22 日付キリスト新聞社)と知り、私は大変失望しました。ウクライナ戦争は全く収束せず、パレスチナの軍事作戦は拡大し続け、イラン戦争が勃発^{おびただ}しています。夥しい数のミサイルがぶち込まれ、小さな子どもがバラバラに吹き飛ばされ、お年寄りや瓦礫の下で押しつぶされ息絶えている。何気ない日常を求める多くの人々の幸せを踏みにじり、阿鼻叫喚の地獄の苦しみを押し付けている。神さまが私たち一人ひとりに託された命の「生きる義務」を軽く見る人物に手を置いて祝福したというのです。強さが正義だと妄信して国連憲章も国際法もすべて無視する政治リーダーに、神の名を唱えて暴力を容認する宗教リーダーたちが擦り寄る姿はあまりにも悲しい。その未来に平安などあるはずはなく、ますます怒りと憎しみが沸き起こり、恐怖と混乱が広がり、自然環境も命も滅びゆくばかりでしょう。

「義のために迫害される人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。」(マタイによる福音書 5 章 10 節)と主イエスは言われました。迫害する側に真の平安が伴うことは無いのです。

私は、小さく弱い雀たちであるけれど、その雀たちに私たちの在るべき姿と真の平安を教えられました。

祈り

創造主なる神さま、すべてはあなたの御手の内にあり、命を支える恵みはすべて、神さま、あなたの愛によって頂いています。どうかあなたのご臨在を確かなものとして我が心に、魂に、霊に刻み付けて下さい。愛の摂理に固く立ち、欲にかられず、怒りや憎しみに捕らわれない強さを一人ひとりに与えて下さい。どうか、あなたの愛に守られているあの雀たちの信頼と平安を得て、この世界が平和へと導かれますように。主の聖名によってお祈りします。アーメン